

赤ちゃんが、片言をしゃべり始めるのは生後8か月を過ぎる頃からでしょう。この頃から言葉の学習は始まっているのです。このときに子どものお手本となるのはお母さんです。言葉はすべて母親から学ぶ、つまり真似るのです。ですから、この時期の母親のしゃべり方や発音は、赤ちゃんの言葉の教育に大きく影響します。

片言をしゃべれるようになると、赤ちゃんは母親の言葉を繰り返し聞くことによって、まだそれを正確に発音することはできなくても、その言葉を頭の中に蓄積させているのです。赤ちゃんはお母さんの目元をしっかりと見えています。お母さんの口元を見ながら一生懸命真似をしようとします。そして「マンマ」のような発音しやすい言葉だと早く言えるようになります。赤ちゃんが、身近ないろいろなものに興味や関心を持ち始めるのもこの頃です。

「これは鼻よ」とか「これは耳よ」とか、すぐに体で感じられるようなことを話しかけてやるようにしてください。

それも、お母さんが自分の鼻をさわって「これは鼻よ」と言って、それから赤ちゃんの鼻をさわって、「鼻よ、鼻、鼻」というように繰り返して言ってやりましょう。これで赤ちゃんは「鼻」を覚えます。つまり、反復によ

って脳が育つのです。

力士は四股を踏みます。横綱になっても四股を踏み続けます。いくら踏んでもムダではないのです。ムダどころか、踏むことが実力を伸ばしていくことにつながっているわけですから、横綱といえども毎日毎日同じことを繰り返しているのです。脳も同じです。

目、耳、鼻、手、足といった、赤ちゃんにとって、もっとも身近なものから、「これは時計よ」とか「これはお菓子よ」とか、赤ちゃんの目に見えるものを教えてやるのがいいでしょう。このとき、「時計」とか「お菓子」という漢字カードを同時に見せてやるのです。

ポイント:漢字を“かな”よりも先に学習した私の長女は、幼稚園の頃から私の二、三倍の速さで本を読んでいた。しかも内容をちゃんと押さえていました。むしろそういう速さで読むと大事なところが頭に残るのではないかと思うのです。